

多国籍の艦隊——湾岸戦争における共同海軍作戦——

アメリカ海軍歴史センター上級史家 エドワード・J・マロルダ

(相澤 淳訳)

一九九一年一月二十九日、イラク軍はサウジアラビアの小部隊を蹴散らし、クウェートとサウジアラビア国境近くのペルシャ湾岸都市、砂塵の街カフジを奇襲攻撃した。すぐさま、同盟防衛軍は小さな国境地点の南に集結した。アメリカ海兵隊がこの南部防衛線のコンクリートブロックの陰から砲撃を加える映像は我々の記憶に新しい。そしてこの直後、アメリカ軍機がこの街の周辺に展開するイラク軍部隊を壊滅すべく攻撃を開始した。湾岸協力会議（GCC）の加盟国であるサウジアラビアとカタールの両国軍部隊も、カフジ奪還へと向かった。この行動は、アメリカの同盟国がイラクとの戦いに勇敢に立ち上がり、アメリカ軍と共に戦う姿を多くの人々に示した。

一方、メディアの注意を引くことはなかったが、カフジをめぐる戦闘では、海上においても多国籍軍部隊による効果的な戦闘が展開されていた。その日の夜、イギリス軍機によつて地上部隊を乗せてカフジ沿岸を南下する一五隻のイラク軍警備艇が発見された。イギリスの駆逐艦グロウセスター、カーディフ、フリゲート艦ブレイズンから発進したリンクス・ヘリコプターは、空対艦ミサイルによってその内の数隻を撃沈破した。そして、アメリカのA-6イントルーダー攻撃機とイギリスのジャガーアクション機も、このイラク軍警備艇に対して爆弾、ロケット弾攻撃を加えた。さらに、イギリス海軍のシーキング・ヘリコプターからの手榴弾、機銃攻撃によつて残りの警備艇のほとんどにも止めが刺された。そして何にも増して重要であったことは、この海上戦闘によつてイラクによる海からのカフジ侵攻が起らなかつたことであつた。

「砂漠の盾」「砂漠の嵐」作戦における非アメリカ・国連多国籍海軍の作戦への積極的関与は、サダメ・フセインに対する勝利に必要不可欠なものであった。多くのアメリカ人が圧倒的なアメリカの軍事的貢献を強調し、同盟国の役割を補助的なものと考へるのは自然なことではある。しかしながら、アメリカ以外の国の海軍部隊も、すべての主要な作戦においてその第一線にあつた。一九九一年一月中旬、多国籍艦隊の約三分の一は彼らによつて占められていた。状況によつては、アメリカ以外の

諸国の艦船、兵器そして戦術がアメリカ海軍にとつて実施困難な作戦要求、たとえば機雷掃討作戦などにこたえる場合もあった。もちろん、各國の海軍部隊が、湾岸戦争前、中、後を通して相互補完する関係にあつたことは言うまでもない。

イラク軍の機甲師団が一九九〇年八月初旬にクウェートを攻撃した時

も、すでに西側の海軍部隊は中東にあつた。ペルシャ湾には、ウイリアム・M・フォガーティー海軍少将が指揮をするアメリカ海軍中東派遣部隊の旗艦ラサールほか七隻の艦艇、駆逐艦ヨークと補給艦オレンジリークからなるイギリス海軍のパトロール部隊、そして、フランス海軍のフリゲート艦プロテが存在していた。米英仏の海軍部隊は、長期にわたつてこの海域を行動範囲としていたのである。

イラクのクウェート侵攻に対して集団的措置をとることへの国際的な支持は、一気に盛り上がりを見せた。フセインがクウェート占領に続いてサウジアラビアにも侵攻することを多くの人々が怖っていた。また、ペルシャ湾岸の石油に大きく依存する世界経済がまさに危機に瀕しているとも人々は信じた。そうして、八月六日に、イラクに対して貿易、金融取引の禁止を課する六六一決議案が国連安保理で採択された。

イラクのさらなる侵攻を抑えるため、サウジアラビアのファハド国王は、領土内でのアメリカおよび西側諸国軍隊の展開を認めた。そしてすぐには、他のGCC諸国もこれに倣つた。ブッシュ大統領や他の西側、アラブ諸国指導者による軍事援助の約束は、間違ひなくGCC諸国を元気づけた。一九八〇～八八年のイラン・イラク戦争中に実施されたGCC

諸国への西側諸国海軍による援助の実績も彼らの同意の根拠となつていった。この時、アメリカ、イギリス、フランスなどの海軍は、ペルシャ湾のオイル・タンカー通航の安全確保をはかることによつてイランからの脅威を除去した。また、アメリカ海軍部隊はその軍事力によつてイランの行動を牽制していたのである。

一九九〇年の秋、多国籍海軍の増援部隊は作戦海域にすみやかに集結した。インド洋で作戦行動についていたアメリカの空母インディペンデンスとその随伴部隊は、ホルムズ海峡付近へと移動した。空母アイゼンハワーとその護衛部隊も、エズ運河を通過し紅海に配備された。その後の数日間で、それらの空母艦載機部隊は、イラクのサウジアラビア侵攻に対抗する準備を完了した。

八月の第三週までに、中東水域にはかなりの数の多国籍海軍の艦艇が行動するようになつた。ペルシャ湾、インド洋／アラビア海、紅海には、アメリカの三隻の空母、一隻の戦艦、そして三〇隻の戦闘艦が展開した。フランスの空母クレマンソーと六隻の水上艦は重要なバブ・アル・マンダブ海峡保護のためフランス保護領ジブティから作戦行動に出た。そして、この各国海軍部隊を、サウジアラビア、カタール、UAE、オマーンなどの海軍の数百の警備艦艇、高速攻撃舟艇、そして港湾防衛部隊が補強した。イギリス海軍の空母アーカロイアルの部隊は東地中海に展開し、ドイツ海軍は第二次世界大戦後はじめてこの地域に掃海艇を派遣していた。

この海軍力の集中によつて、リビア、ヨルダン、イエメン、そしてスー

ダンなどの親イラク国家がフセインを助けることは無謀なことになつた。

彼らは、サウジアラビアの背後を攻撃することも、イラクに軍事物資を

補給し、義勇軍を派遣することも、あるいは多国籍海軍の艦艇に対してもテロを謀ることもできたであろう。しかし、これら敵対アラブ国家の經濟基盤は沿岸地域に位置していたため、こと海軍力に関する彼らの脆弱性は明らかであつた。

アラビア半島周辺海域における海軍力の増強は、国連安保理がフセインの行動に影響力を行使することを可能にした。一九九〇年の初秋、国連側はフセインにクウェートからの撤退を強要するほどの地上軍を持つていなかつたし、それから数カ月間も地上での十分な攻撃力を持つには至らなかつた。この間、独裁者に政治的、経済的圧力を加え、彼の軍隊の戦争準備を遅らせたのが、海軍部隊であつた。

八月二十五日、安保理は六六五決議案で国連のイラクへの禁輸措置を実効ならしめるため、必要とあれば武力を行使することを加盟国に認めた。国連はペルシャ湾で作戦を指揮する司令部を持つていなかつた。そこで、シユワルツコフ将軍はヘンリー・モーツ海軍中将に禁輸監視のための指揮機構を組織するよう求めた。九月九日と十日に、アメリカの海軍将官主催による「コーディネイティング・グループ」として知られるようになる各国海軍代表者会議がバーレーンで開かれた。会議では、禁輸のための遮断手続きが確定され、監視区域がそれぞれに分担された。このグループのほとんどのメンバー国によって、アメリカ海軍が禁輸監視のコーディネーターたるべきことが支持された。アメリカ海軍は第二

次世界大戦以降の数多くの共同作戦における伝統的指導者であり、湾岸地域での最大の海軍力保持者でもあつた。

しかしながら、フランスはイタリアの支持も得て、西ヨーロッパ連合（WEU）の海軍部隊の独自の役割を強調した。この意見対立解決のため、モーツによれば「我々は単にWEU諸国には遮断行為が起こらないような地域での作戦を命じ、我々は計画通りに行動した」のであつた。禁輸監視作戦における指揮統制は、その厳密さに問題がなかつたわけではないが、うまく機能したのである。

九月の会議の結果、イギリスとカナダが中部ペルシャ湾での作戦でアメリカの戦術統制の下で行動することも同意された。これは、相互のレーダー、情報伝達、兵器システムの互換性によつて可能になつたことであつた。各国海軍は、ペルシャ湾、オマーン湾、アデン湾、そして紅海の上空警戒区域についても割り振りを行なつた。アメリカのP-3オライオン、イギリスのニムロッド、そしてフランスのアトランティック各哨戒機もまた海上遮断作戦の一翼を担つたのであつた。

一般的に、禁輸監視部隊は、無線によつて商船に停船を命じた後、運搬物に対する立ち入り検査（臨検）を実施した。そして、もし輸出入禁止品がないと確認されれば、その商船は通航を許された。場合によつては、相手の船長が立ち入り検査を拒否し停船しなることもあつた。その際は、多国籍海軍の艦艇、航空機、そして艦載ヘリコプターがなんとか停船させるように努めた。なお、これに失敗した場合は、イギリスのコマンド部隊、アメリカ海軍の特殊部隊（SEALS）、もしくはアメリカ

海兵隊員がヘリコプターから船に飛び乗り、船を管理下に置いた。数多くの商船が、国連側の港に送られ、運搬物が差し押さえられた。

一九九〇年十月一日、カナダの駆逐艦アサバスカンの乗組員はチブ・サルタン号を立ち入り検査したが、禁制品が発見されず、この船は通航を許された。中部ペルシャ湾では、「砂漠の嵐」作戦までに全臨検の二五%がカナダ海軍によつて実施された。一方、一九九〇年十月二十八日のイラクのオイル・タンカー（アムリヤ号）臨検では、多国籍海軍がどのように連携していたかがわかる。このタンカーはオマーンに近いマシラ島沖を高速でイラクに向かっている時に、オーストラリアのフリゲート艦ダーウィンにレーダーで捕捉され、やがて視認された。イギリスのフリゲート艦ブレイズンとアメリカのフリゲート艦リーズナーがすぐにオーストラリア艦に合流した。はじめに無線交信した際、イラク船船長は立ち入り検査のための停船を拒否した。この時、アメリカの指揮官は、ダーウィンにアムリヤ号の前方に位置し進路をおさえるよう指示した。これに失敗すると、彼はダーウィンとリーズナーにイラク船の進路前方への警告射撃を命じた。この試みも失敗し、さらにF/A 18とF 14による低空警告飛行もタンカーの行く手を阻むことはできなかつた。最後に、アメリカの揚陸艦オグデンのヘリコプターからアメリカ海兵隊員がアムリヤ号に乗り移り、海兵隊員と一部SEALs隊員によつてアムリヤ号は多国籍海軍側の管理下に置かれた。その後、オーストラリア海軍、アメリカ海軍、そしてアメリカ沿岸警備隊の隊員によつて船内の検査が行なわれたが、禁制品は発見されずこのタンカーは解放された。明らかに

イラクは多国籍海軍の決意の程を試したのであつた。

西側同盟の海軍は、長年の経験から円滑に共同行動をとることができた。冷戦期を通して、オーストラリア、スペイン、アルゼンチン、その他の西側の海軍は、アメリカ海軍との共同訓練を重ね、この経験が相互の理解と意志伝達を促進してゐた。オーストラリア海軍は湾岸戦争での行動を彼ら自身の訓練成果としてだけではなく、アメリカ海軍との定期的な共同訓練の産物と見てゐた。スペインのフリゲート艦ベンセドラの司令官は、オランダ、イギリス、フランス、そしてアメリカ間の共同作戦の歴史は早くも一九六〇年まで遡る、と語つた。

ペルシャ湾での西側諸国海軍は、それぞれの行動指針、作戦手続き、そして戦術についてお互いに理解することが可能であつた。アルゼンチンのエデュアルド・アルフレド・ロゼントハル海軍大佐は、現代の西側の海軍作戦には共通の言語、特性、思考様式が含まれるために、手続き事項は限定されたものであつた、と記している。

駆逐艦アサバスカン、フリゲート艦テラ、ノヴァ、補給艦プロテクターから成るカナダ海軍任務部隊のペルシャ湾派遣は、NATOとしても価値ある経験となつた。ケン・サムナー代将指揮のカナダ任務部隊は、ジブラルタル付近でイギリス海軍と集中的な共同訓練を実施し、南フランス沖ではフランス海軍と対エクゾゼ（ミサイル）訓練に従事し、湾岸に入る前にはアウグスタのNATO施設で磁気の除去処理を受けていた。駆逐艦アルミランテ・ブロウンとコルベット艦スピロから成るアルゼンチン海軍任務部隊の経験も、多国籍海軍の結束を象徴するものであつ

た。セネガル、フランス、そしてイタリアの海軍当局は、アルゼンチン部隊のペルシャ湾岸への航行途上に、ダカール、ツーロン、アウグスタなどの各港で燃料、物資の補給、簡単な修理の実施を行なつた。ロゼントハル大佐指揮の部隊が戦場に到着した際も、彼らはアラブ首長国連邦の港で心からの歓迎を受けていた。

海軍の医療支援の提供は、多くの国の努力によつて支えられた。「砂漠の嵐」作戦開始まで、アメリカ海軍の病院船コンフォートが四〇名のオーストラリア軍医、看護婦を含む医療部隊を乗せて任務に就いていた。カナダの医療チームもアメリカの病院船マーシーに乗り組み、また、ポーランドは病院船を湾岸に派遣していた。

ドイツ、イタリア、その他のヨーロッパ・メンバー国、ヨーロッパ・メンバーハード他二隻の揚陸艦が、第二次世界大戦で「砂漠の嵐」と呼ばれた第七機甲旅団を輸送した。なお、朝鮮戦争やベトナム戦争時には、

また、自國の艦船を湾岸への軍隊輸送に従事させた。イギリスでは、サーガラハド他二隻の揚陸艦が、第二次世界大戦で「砂漠の嵐」と呼ばれた第七機甲旅団を輸送した。なお、朝鮮戦争やベトナム戦争時には、戦闘車両、弾薬、燃料、その外一般物資の九五%が海上輸送されていた。多国籍海軍の艦艇は、湾岸の防空任務の一翼も担つた。イラクは七五〇機もの戦闘用航空機を保有していたから、これは重大な任務であつた。ペルシャ湾南部のダマン、アル・ジユベイル、そしてバーレーンは、航空攻撃の重大な危機にさらされていた。多国籍軍の派遣部隊の補給線は、これらの港を経由地としていた。オーストラリア海軍任務部隊の指揮官であつたC・J・オクセンボールド代将によれば、「砂漠の嵐」作戦前の

イラクによる先制航空攻撃の可能性は、きわめて高いと見積もられていました。そして確かに、イラクは海上での大型船舶に対する攻撃方法を心得ていた。iran・イラク戦争時、イラク機はペルシャ湾奥深くに飛来し、イランの港湾、石油基地、オイル・タンカーを攻撃、タンカーについては撃沈破したもののが数百に上つていた。ロゼントハル大佐は、「いつも指揮官たちの頭を支配していたこと」は、アメリカのフリゲート艦スタークの記憶であった、ことを認めている。イラク機により、スタークは二発のエグゼ・ミサイル攻撃を受け、危うく沈没しかかつたのであつた。イラク機は、イラン沿岸の山岳地帯の谷間を飛行し、レーダーの網の目の下から多国籍艦隊や三つの港を急襲することも容易にできたであろう。イランには国連側との戦いを聖戦とする急進派も存在したため、イラク機による攻撃の可能性も無視することはできなかつた。

アメリカ海軍は、イージス艦を配置することによつて対空脅威に対する防空第一線を形成した。しかし、他の各国海軍の艦艇は、この前哨線の後方でのみ対空任務に従事できる状態であった。洋上上空警戒は、アメリカ海軍の戦闘機と地上発進の海兵隊F/A 18そしてカナダ空軍のCF 18がこれにあたつた。サウジ機によるペルシャ湾上空でのイラク機二機の撃墜は、その後の敵の行動を抑制したと思われる。

多国籍海軍は、また、湾岸上空に飛来する数百の友軍機を正しく識別することができていた。スタークの惨劇は、海軍司令官達にとつて生々しい記憶であった。しかし、iran・イラク戦争時にイランの民間機を撃墜した巡洋艦ヴィンセンズの経験も忘れられてはいなかつた。湾岸戦争

においては、航空管制任務には特別な手法が取り入れられていた。一人の海軍指揮官が、あらゆる友軍部隊による飛行物体の認知、確認、追跡、または除去について細心の注意を払つて監督したのである。友軍機によつて撃ち落とされた多国籍軍の航空機は一機もなかつた。

一九九一年一月十七日の早朝、多国籍軍はイラクとクウェートの敵軍に周到に準備された大規模な航空攻撃を開始した。ペルシャ湾、紅海、東地中海に位置するアメリカの戦艦、駆逐艦、フリゲート艦、そして潜水艦からは、二九七発のトマホーク・ミサイルがバクダッド市街に打ち込まれた。六隻のアメリカ空母から発進した戦闘攻撃機部隊は、イギリス、フランス、イタリア、そしてGCC諸国の航空機とともに、航空電撃戦に参加した。イタリア、オランダ、そしてオーストラリアの艦艇は、アメリカ空母の護衛任務に当たつた。

ブリスベーンの艦橋にあつたオクセンボールド代将は、「アメリカ艦艇から発射されたトマホーク・ミサイルの波と、それに続く空母機の発進の波」を目撃していた。彼によれば「アメリカの司令官達が穏やかな口調で彼らの緻密なイラク攻撃計画をはじめて明かした時、作戦室が厳肅に静まりかえつた光景は終生忘れがたい光景」であった。

海上からの作戦は、「砂漠の嵐」作戦成功の鍵を握る作戦であつた。しかし、「ひとたび航空と地上の作戦と対比されると、海上作戦は幾分見過ごされ、誤解され、そしてその戦争努力が十分に評価されない」傾向が見られる。そこで、海軍の攻撃作戦がイラク軍への全作戦中で必要不可欠な部分であつたと強調することが重要となる。一月十七日、スタン・

アーサー海軍中将に指揮された多国籍海・空軍部隊は、クウェート・イラク沖の敵の防衛戦破壊に大きな努力を振り向けた。そこには、イラク海軍の艦艇、機雷、要塞化された石油基地、沿岸ミサイル、対空基地、砲撃陣地、そして地上部隊が、多国籍軍の作戦を阻止するよう展開しているのである。

クウェートの警備艇イステイグラル、アメリカのフリゲート艦ニコラス、イギリス海軍、アメリカ海軍のヘリコプター、そしてアメリカのフリゲート艦から発進したアメリカ陸軍のヘリコプターは、一月十八日に最初の大規模な海上作戦に着手した。この部隊は、イラクによって多国籍軍の航空作戦監視に使われていた海上石油基地を敵の手から奪い取つた。ここで多国籍軍は、一二三名のイラク兵を捕虜とし、また、五名を死傷させた。

アメリカ、イギリス両海軍は、湾岸戦争で共存の関係にあつた。シーエンクース・ヘリコプターは、早期警戒装置を持つアメリカのSH-60シーホーク・ヘリコプターとともに、ハンター・キラー部隊として行動した。両ヘリコプターの兵器と装備は、任務達成のために相互補完の関係にあつた。端的に言えば、これらのヘリコプターとアメリカのA-6イントルーダー、F/A-18、イギリスのGR-1Aジャガル、ニムロッド、そしてサウジアラビアのドーフエン・ヘリコプターなどの航空機が、イラクの水上部隊を壊滅させたのである。戦争終了までに多国籍軍は、一四三隻のイラクのミサイル艇、機雷敷設艇、掃海艇、上陸用舟艇、そして警

備艇を撃沈破していた。

一般的に抱かれている「イギリス海軍とアメリカ海軍のみが、：実際の戦闘に参加した」という認識は、正しいものではない。他の国の海軍部隊も水上作戦に参加をし、危険地帯を行動していたのである。また、アメリカ海軍以外の指揮官も重要な作戦で独立した指揮権を行使していた。その一例が、サムナー代将指揮のカナダ戦闘支援部隊の創設であった。彼は、カナダの役割に特別な認識を得られるよう、中部ペルシャ湾で指揮下の三隻の艦が一緒に行動することを望んだ。カナダ部隊は、「過去に示された実績、アメリカの戦術ドクトリンへの精通度、そして何にも増して指揮伝達システムの共通性」から見て、こうした任務には最適であつた。NATOでの経験も、ここで有利に働いた。アメリカおよび他の海軍のリーダー達はサムナーの提案を受け入れ、カナダのダンカン・E・ミラー海軍大佐が戦闘支援部隊のコーディネーターとなつた。これ以降、ミラー大佐は六〇隻以上の多国籍軍艦艇に対する補給支援の調整に当たつた。

アメリカ海軍とイギリス海軍は、クウェート沿岸に配置された敵軍の部隊、要塞、そして長距離兵器への攻撃でも密接に連携した。とくに司令官達を悩ましていたのは、敵の射程六〇マイルのシルクウォーム対艦ミサイルであつた。二月二十五日、アメリカの戦艦ミズーリ、イギリスの駆逐艦グロウセスター、そしてアメリカのフリゲート艦ジャネットは、クウェート沖で作戦行動をとつていた。その朝、イラク側は二発のシルクウォームをこの部隊めがけて発射した。一発は海上に落下し、他の一

発はグロウセスターの一発のシー・ダート・ミサイルが撃ち落とした。

掃海作戦については、戦争中を通して主にアメリカとイギリスの艦艇およびヘリコプターが実施したが、サウジアラビア、イギリス、オーストラリアの潜水夫もアメリカのSEALsの隊員などとともに、機雷の掃討に当たつていた。こうして、機雷掃討部隊は敵の機雷封鎖海域に航路を開設することに成功し、戦艦ミズーリやウインシスコンがクウェート沿岸近くに接近すること、および、アラブ側やアメリカ海兵隊への物資補給などを可能にしていた。しかし、この艦砲射撃および補給部隊のための航路開設にはそれなりの犠牲を伴つていた。

クウェート沖のイラクによる機雷封鎖海域の掃海をめぐつては、英米間に重大な摩擦も生じていた。イギリス海軍派遣部隊の司令官クリス・クレーグ代将は、イギリス側の関知しないところで作られたアメリカ側の手による掃海計画を突然知らされ、これを非常に不服とし、この計画を「自殺行為」と酷評した。にもかかわらず、彼と彼のスタッフおよびアメリカ海軍の担当者は、相互に受け入れ可能な共同機雷掃討部隊運用の計画を作り上げることに成功した。

最善の掃海計画の下でも、強襲揚陸艦トリポリは触発機雷によって重大な損傷を受けたし、固定磁気機雷が巡洋艦プリンストンの艦尾をあわや直撃するという事故はおこつた。その中で、カナダの駆逐艦アサバスカンは、この傷ついたアメリカ巡洋艦を機雷危険水域で曳航し、修理港に送りとどける護衛任務をはたした。オーストラリアのミサイル・フリゲート艦シドニーもこの危険海域で作戦行動していた。

二月二十四日から二十八日の戦闘で、国連多国籍軍はフセインの軍隊

の敗北を決定的にした。この局面で、海軍部隊、とくに空母艦載機部隊、戦艦、上陸用艦艇部隊、そしてSEALs部隊は、フセインの目を彼自身が多国籍軍が上陸してくるであろうと予想した海岸に釘付けにする、という重要な役割を果たした。

湾岸戦争終結後、レイノー・A・K・ティラー海軍少将が調整役となつた多国籍海軍部隊は、行動困難な北部ペルシャ湾海域でイラク側敷設の千二百個の機雷を除去、破壊する任務に当たつた。ベルギーとフランスの機雷掃討艇は、一九九一年の五月中旬までに約五百個の機雷を破壊した。フランスの機雷掃討艇サキテールは見事な働きを示し、わずか二〇日間に一四五個の機雷を処分した。掃海任務には、イギリス、フランス、ベルギー、バーレーン、クウェート、サウジアラビア、オランダ、そしてイタリアの諸海軍がその艦艇、航空機を派遣したばかりか、ドイツと日本の海軍も艦艇の派遣を行なつてゐた。後者の海軍は、第二次世界大戦終結以降はじめてこうした場で作戦行動したのであつた。

このほか、多国籍海軍部隊は、クウェートの港湾に仕掛けられた機雷、爆発物等の戦後処理も行なつた。困難なこの任務遂行のため、アメリカ海軍はイギリスとオーストラリア海軍の潜水チームの増援を得て、二三名のチームによつてクウェートの港湾施設、石油精製施設、三〇隻のオイル・タンカーを含むイラク沈没船海域の掃海作業に当たつた。クウェート沿岸の数百万バレルの石油の存在はこの掃海任務を非常な困難と危険にさらしたが、クウェートの海底で発見されたおびただしい数

の死体が作業の士気向上により直接的に影響した。

一九九一年末までに、湾岸戦争で戦い勝利した七〇万人の多国籍軍地上部隊の軍用車両、装備、そして補給物資はそれぞれの国に帰還した。一方、多国籍軍の海軍部隊は、イラクのさらなる冒險主義への目に見える即応抑止力として任務を継続し、さらに、国連側のサダメ・フセイン説得への主要な手段たる禁輸措置強化をはかることさせした。一九九六年五月現在、多国籍海軍部隊は、一万二千隻を越える船舶に停船命令を出し、一万隻に臨検し、五五二隻を検査のための港への行き先変更とさせている。

日間に一四五個の機雷を処分した。掃海任務には、イギリス、フランス、

ベルギー、バーレーン、クウェート、サウジアラビア、オランダ、そしてイタリアの諸海軍がその艦艇、航空機を派遣したばかりか、ドイツと日本の海軍も艦艇の派遣を行なつてゐた。後者の海軍は、第二次世界大戦終結以降はじめてこうした場で作戦行動したのであつた。

結論としていえることは、多国籍軍の海軍部隊は国連側のサダメ・フセインに対する勝利に決定的役割を果たした、ということである。この海上部隊の存在がなければ、たとえ不可能ではなかつたせよ、イラクへの外部からの援助の遮断、サダメ・フセイン支援国への抑止、国連側の海上輸送路の確保、地上および航空戦での勝利、そしてクウェート、イラク沿岸での早期のイラク軍の無力化などは非常に難しいものになつていたであろう。

多国籍海軍の作戦が大きな成功を収めた主たる要因は、参加各国の海軍がひとつチームとして機能したことであつた。第二次世界大戦終了後から行なわれている共同訓練の実施、共通の兵器、装備の採用、各国海軍の交流などから、アメリカ海軍と他の海軍から成る混成部隊は、最小限の困難で共同の作戦行動をとることができた。協調と順応と実用主

義がこの共同海軍作戦を特徴づけていたのである。

◎筆者紹介◎

一九四五年七月、アメリカに生まれる。ペンシルバニア軍事大学卒業、ジマージワントン大学から博士号（歴史学）を取得。一九六九年から七〇年にかけてベトナム戦争に従軍。一九七一年から米国海軍歴史センター史家、八七年同現代史部門部長、九六年同上級史家・所長専任顧問。*Carrier Operations: The Illustrated History of The Vietnam War(1987), By Sea, Air, and Land: An Illustrated History of the United States Navy and the War in Southeast Asia (1994)*ほか、ベトナム戦争、アメリカ海軍に関する著書、論文多数。